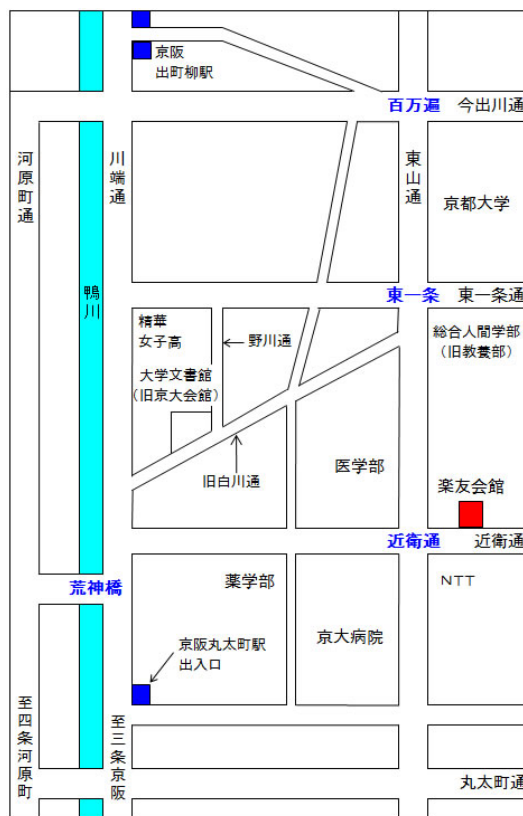


インド思想史学会 第25回学術大会 プログラムと発表要旨

開催日：2018年12月22日（土）

会 場：京都大学 楽友会館

京都市左京区吉田二本松町 TEL: 075-753-7603



〒606-8501

京都市左京区吉田本町 京都大学人文科学研究所気付
インド思想史学会事務局

TEL: 075-753-6949 (藤井) / 2460 (横地)

E-mail: hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp

http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~hit/

本状は郵便での送付に先立ってメールでも会員の皆さまにお送りしています。本状を添付したメールが届いていない会員の方には、メールアドレスが未登録ですので登録をお願いします（本文にお名前を書いたメールを事務局 hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp にお送りくださるだけで結構です）。

インド思想史学会 第25回(2018年度)学術大会のご案内

インド思想史学会会長 井狩彌介

インド思想史学会第25回学術大会を下記の通り開催いたします。
皆様、万障お繰り合わせの上ご参加ください。

記

開催日 2018年12月22日(土)

会場 京都大学 楽友会館 2階 会議・講演室

(理事会 12:00 – 13:00 京都大学 楽友会館 2階 会議室5)

参加受付 13:00 から 京都大学 楽友会館 2階 会議・講演室前
参加費：1000円 懇親会費：3000円

研究発表者および発表題目

13:30 – 14:20 Andrey Klebanov (京都大学文学研究科・特定講師)

“In search for the text of the oldest commentary on *kāvya*-. Problems involved in the preparation of the critical edition of Prakāśavarṣa’s commentary on the *Kirātārjunīya*.”

14:20 – 15:10 齊藤 茜 (日本学術振興会海外特別研究員・フランス国立極東学院ボンディシェリ支部)
「マンダナミシュラの文意論」

—— 休憩 ——

15:30 – 16:20 堂山 英次郎 (大阪大学文学研究科・准教授)

「Pāṇ. III 4,7–8 が規定するヴェーダ語接続法の機能について」

16:20 – 17:10 手嶋 英貴 (京都文教大学・教授)

「『カタールサリト・サーガラ』に見られるラーマ物語の歴史的位罫」

総会 17:15 – 17:45 引き続き、2階 会議・講演室で

懇親会 18:00 – 20:00 楽友会館 1階 食堂にて

In search for the text of the oldest commentary on *kāvya*-.

Problems involved in the preparation of the critical edition of
Prakāśavarṣa's commentary on the *Kirātārjunīya*

Andrey Klebanov (Kyoto University)

In my talk I would like to introduce preliminary data essential for the preparation of a critical edition of the *Laghuṭīkā*, a commentary on the *Kirātārjunīya* composed by someone Prakāśavarṣa. According to the hypothesis expressed by the late Prof. Eugen Hultzsch in 1911 and repeated in subsequent scholarship, the author of this text could have been identical with the teacher of the famous Kashmiri commentator Vallabhadeva (fl. ca. 10th century). Should this assumption be proven true, the text of *Laghuṭīkā* could be declared the oldest commentary on a work of *kāvya*- available to us today.

However, the manuscript transmission of the *Laghuṭīkā* is marked with an unusual degree of textual variation that considerably hampers the task of a critical editor. In my talk I would like to demonstrate the philological difficulty at hand by introducing the individual transmissional lines of the *Laghuṭīkā* and by discussing their general features. Subsequently, I would like to introduce different attempts at evaluating the historical position of the individual lines based on a wide range of collected data (internal and external to the text of the commentary) and utilising a variety of analytical approaches (such as, above all, the method of structural analysis of commentaries on *kāvya*- that I have discussed in my doctoral dissertation).

It must be noted in advance that many questions concerning the comparative historical position of some transmissional lines of the *Laghuṭīkā* remain yet to be answered.

マンダナミシュラの文意論

齊藤 茜

(日本学術振興会海外特別研究員、フランス国立極東学院ボンディシェリ支部)

マンダナミシュラ (7~8c.) は、その著作 *Sphoṭasiddhi* において、所謂「文法学派」が奉じた言語論であるスポータ理論の正当性を論証した、とされる。だが、ここで中世以降のスポータ理解に基づいて、語→語意、文→文意の要となる「対象理解を引き起こす語の本質」としてスポータを捉え、それに基づき言語のあらゆる構成要素を否定する見解へと進むと、マンダナの他著作 *Vidhiviveka*, *Brahmasiddhi* の内容との間に若干深刻な齟齬が生じる。両著作において、言葉そのものについてマンダナが語る箇所は多くはないが、その中で指摘するに値する二点がある。

1. *Vidhiviveka*: バルトリハリの直観 (*pratibhā*) に対する明らかな批判があり、その中でシャバラの言明が肯定的に引用される。
2. *Brahmasiddhi*: 単語・文・章は、真に存在する諸音素を質料因とする、仮の現れに過ぎないと述べられる。

この二つの箇所は、音素 (*varṇa*) を言語の最小構成単位と見做している点で共通している。初期の作品と見做される *Vidhiviveka* と後期の作品と見做される *Brahmasiddhi* にこのような共通点があることから、単純に *Sphoṭasiddhi* の前後でマンダナの考えが変化したと片づけることは難しい。では我々はこの点について解決策を見出せるか。

Vidhiviveka, *Brahmasiddhi* の両箇所ともに、マンダナ自身はスポータという語を用いていないが、前者では、ヴァーチャスパティがスポータに言及して注釈している。しかし、バルトリハリの *Vākyapadīya* 一巻で論じられたスポータが後に彼のあらゆる議論と結びつけられ、恐らくは彼の意図しなかった思想的発展を遂げた事実を我々は知っている。マンダナの著作においても安易な同値を斥けることで、両者が併存する道はないだろうか。ところで、マンダナは *Sphoṭasiddhi* において、文意については全く語らなかった。では彼が文意論について一切持論を語らなかったかというそうではない。*Brahmasiddhi* の第一章において、マンダナは主としてプラバーカラの指令 (*niyoga*) 説を対論としながら、文意とは何か、それがどのように起こるのかを説明する。プラバーカラの指令説は、度々マンダナの敵論となり、特にヴェーダ文の指令について考察する場合には、我々は *Brahmasiddhi* 第三章及び *Vidhiviveka* を参照せねばならないが、第一章での議論は、日常言語に限定されるためもう少し分かりやすい。最終的には、ウパニシャッド部分が「事実言明」であるとの主張に繋がるこの一連の文意についての議論は、俯瞰したとき、マンダナが文意論に関して取った戦略は、所謂「スポータ論者」のそれとは異なるのではないかという印象を与える。これらの部分を手掛かりに、本発表では、マンダナの言語哲学における一貫性を考察する。

そもそも *Vākyapadīya* におけるスポータ理論の位置づけは如何なるものであったか。またマンダナの三著作全てを知っていたヴァーチャスパティのマンダナ理解に触れながら、マンダナの三著作の言語理論の軸自体にぶれがないかどうかを示すのが、本発表の目的である。

Pāṇ. III 4,7—8 が規定するヴェーダ語接続法の機能について

堂山 英次郎
(大阪大学)

パーニニに規定されるヴェーダ語の動詞の統語機能や意味を特定することは、語形の同定に比べてより多くの困難を伴う。しかしながら、近年歴史言語学や文献学が蓄積してきたヴェーダ語動詞の知見によって、パーニニが理解していたであろう動詞の各種範疇の意味・機能の理解を更に深める余地はまだ残されている。本発表はこうした問題意識のもと、ヴェーダ語に特徴的なムード（法）である接続法（subjunctive）を取り上げる。

ヴェーダ語の接続法は形態的にも統語的にもṚgvedaにおいて最も生産的であり、その後時代が下るに従い機能・用法が限定され、最終的にはその1人称語形だけが、文法上もともと1人称を欠く命令法の一部として残った。パーニニによる接続法の扱いも、特に機能・用法に関しては、時代を通じて生産的であった願望法（optative）に比べて遥かに少ない。即ち、Pāṇ. IIIには、願望法についての統語的・機能的な規定が多く含まれるのに対して、接続法に関しては2つのスートラだけが、しかも願望法を援用する形でその用法を規定するに過ぎない：III 4,7「[ヴェーダ語では、任意に]、願望法の意味で (*liṅarthe*) [動詞語基の後に] 接続法 (*leṭ*) [接辞] が用いられる」、8「[ヴェーダ語では、任意に?], *upasaṃvāda* 及び *āsaṅkā* の意味でも (*ca*), [動詞語基の後に] 接続法 [接辞] が用いられる」。しかしながら、これらのスートラの解釈は一定しない。7に言われる願望法 (*liṅ*) と接続法との機能的対応関係、8における *anyatarasyām* の *anuvṛtti*, *upasaṃvāda* の意味, *ca* の機能など、不確定な点や、注釈者・学者の間で見解が食い違う点が少なくないからである。

本発表はこうした解釈の相違を踏まえた上で、Pāṇ. III 4,7—8をヴェーダ文献に見られる接続法の実例と照らし合わせ、これらが接続法のどのような機能・用法を念頭に置いているのかを考察する。考察に際しては、(1) ヴェーダ文献における接続法の機能の実際、(2) パーニニの時代に推定される接続法・願望法・命令法の機能とそれらの関係性（接続法の衰退とその機能の分担）、(3) 4,8の *upasaṃvāda* 及び *āsaṅkā* の解釈、が中心となる。(3)については、RENOU (*La décadence et la disparition du subjonctif*. Paris 1937) や TICHY (*Der Konjunktiv und seine Nachbarkategorien*. Bremen 2006) が、Kāśikā に従い、*upasaṃvāda* を合意（取り引き）における対価の「選び取り」の接続法として、また *āsaṅkā* を *néd* と共起するそれとして理解するが、この再検討も必須である。以上の諸点の考察によって、よりヴェーダ語の実情に即した当該スートラの理解が可能になるとともに、接続法の歴史的展開についても理解が進むものと期待される。

『カターサリト・サーガラ』に見られるラーマ物語の歴史的位置

手嶋英貴（京都文教大学）

ヴァールミーキに付託される叙事詩『ラーマヤナ』(*Rāmāyaṇa*)の翻案ものの一つに、ソーマデーヴァ作『カターサリト・サーガラ』(*Kathā-Sarit-Sāgara*、以下『カターサリト』あるいはKSS、11世紀)第9巻に収録された、わずか50頌余りのラーマ物語がある。この作品は、『ラーマヤナ』のうち後日談にあたる「ウッタラ・カランダ」の物語を簡略にしたもので、従来ほとんど注目されてこなかった。本発表では、この『カターサリト』のラーマ物語が有する先行諸作品との関係、および後代諸作品への影響を検討する。発表の概略は以下の通りである。

『カターサリト』のラーマ物語には、先行するラーマ物語諸作品にない独自要素が複数見られる。まず物語で中心的な役割を演ずるラーマの息子たち「クシャとラヴァ」の出生譚が大きく異なる。『ラーマヤナ』、『ラグヴァンシャ』第15章、『ウッタラ・ラーマチャリタ』、『パドマプラーナ』第5巻「パーターラ・カランダ」、そして『ジャイミニーヤ・アシュヴァメダ』(*Jaiminīya-Aśvamedha*、以下『ジャイミニーヤ』、11~12世紀頃か)第29~第36章などの先行諸作品では、常に彼らが「双子」として生まれることになっている。ところが『カターサリト』では、最初シーターがラヴァのみを出産する(KSS 9.1.86-87)。そしてクシャは後日、ヴァールミーキ仙がクシャ草で編んだ人形に命を吹き込んで創出することになっている(KSS 9.1.88-90)。その他にも、リングを玩んだ償いにラヴァがクベーラ神の園から蓮等の花を盗んで来る話(KSS 9.1.95-99)、ラクシュマナがプルシャメダの犠牲としてラヴァを捕える話(KSS 9.1.100-102)など、この作品固有の筋書きが目立つ。本発表ではこれら独自要素の起源を探る傍ら、『カターサリト』のラーマ物語の原型が『ジャイミニーヤ』に近い何らかの伝承に基づくことを推論する。

上述のラーマ物語はやがて、他方で広く受容されていた『ジャイミニーヤ』の物語と接合されるようになる。その代表例が、作者不明の『アーナンダ・ラーマヤナ』(*Ānanda-Rāmāyaṇa*、15~18世紀頃か)である。同様のケースは近世の地方語ヴァージョンにも見られる。例えば18世紀から19世紀にかけてカシュミリー語で編まれたディヴァーカーラ・プラカーシャ・バッタ(*Divākara Prakāśa Bhaṭṭa*)のラーマ物語後日談『ラヴァクシャ・ユッダチャリタ』(*Lavakuśayuddhacarita*)には、ヴァールミーキ仙による草からの一児創出など、『カターサリト』中のエピソードが組み込まれている。本発表では、これらの諸本の筋書きを紹介しつつ、近世以降のラーマ物語がしばしば『カターサリト』系の伝承に影響を受けていること明らかにする。

なお、東南アジアのラーマ物語を調査した大野徹氏らの研究によれば、『カターサリト』の筋書きに特徴的な「ヴァールミーキによる一児創出」というエピソードは、マラヤ語『ヒカーヤト・スリー・ラーマ』(*Hikayat Seri Rama*)、タイ語『ラーマキエン』(*Ramakien*)、クメール語『リアムケー』(*Reamker*)、ユアン語『グヴァイ・ドヴォラビ』(*Gvay Dvorabhi*、ラオス)、ビルマ語『アラウン・ヤーマ・タージン』(*Alaung Rama Thagyin*)、傣語『蘭嘎西賀』(中国雲南省)などに含まれている。ここから、東南アジア諸本の多くが、『カターサリト』系の伝承を取り入れた何らかのラーマ物語を手本として編まれたことが窺われる。